ポピュリズムの変換

――石原慎太郎イメージの分解――

森　元　孝

二〇〇三年の東京都知事選挙、当選した石原慎太郎は三百万を超える票を獲得した。投票前から石原圧勝の予測が可能であり、強力な対立候補の擁立すら難しい雰囲気となっていた。この雰囲気は、政治的なそれか、あるいはもっと他の何かによるものか。三百万を超えた集票力は、石原個人のパーソナリティに拠るものか。仮にそうだとしても、三百万の投票者それぞれのパーソナリティは、石原個人のそれと同一ではない以上、どのように適合的になりえたのかについて問う必要がある。

「好き」か「嫌いか」という「人気のあるなし」(図1)、ただそれだけで政治が動いていくこと、言い換えると、具体的な内容を欠いた政治を「ポピュリズム」のそれと呼びたい。[1]

1. 誰が石原に投票するか？

三百万という数を考えると、「人気」といえども、その雰囲気が隠している多様性は相当なものがあろう。この多様さを一枚岩のようにまとめている「人気」を括弧に入れて、潜在すると考えられる構造を想定して諸要素に分解していくことが、本稿の主題である。

(1) 投票と年代

国政選挙についても言えることであるが、東京都においては投票率の高低と年代とには一定の関係がある。すなわち年代が高くなれば、投票率も高くなるのである。次頁の図2は、過去3回の東京都知事選挙の年代別投票率の比較である。

一九九九年は石原が初当選した選挙であるが、その選挙直前、現職の青島幸男が再選立候補せずと表明、後継をねらって複数の候補者が登場、最後に立候補した石原が勝利した。知名度ある候補が複数立ったことで、投票率が全体的に上がった。これに対して二〇〇三年は、有力対立候補擁立が難しく石原圧勝を予測でき、それゆえに投票率が全体的に下がった。ただし、この図2から明らかなことは年齢が高くなるにつれ、人は投票に行くということである。

もともと若い人は投票に行かなかったのであろうか。次頁の図3

は、若年者の投票率推移である（都選管「若年層の投票率推移」）。

一九七九（昭和五十四）年、一九八三（昭和五十八）年と前回の二〇〇三年を比べると明瞭である。たしかに、もともと投票率は全体平均より若年者の方が低かったが、現在ほどではなかった。

さて、左の表1は、年代別投票率のみならずさらにその人口も加味し、年代別投票者数を推定したものである。

少子高齢化が現代日本の重要な問題ではあるが、東京はやはり大都会であり、若年者の数は少なくない。表を単純化して、まずは四十九歳以下と五十歳以上とにまとめて、それぞれ対比すると、左中の表1aとなる。

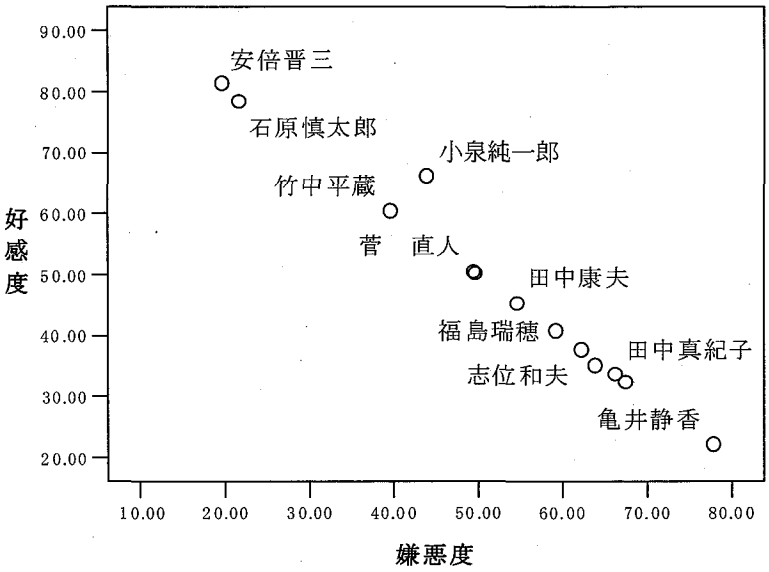
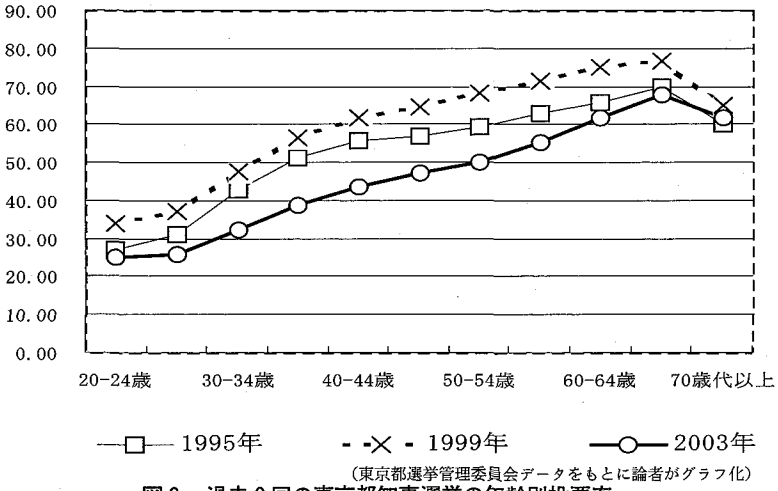
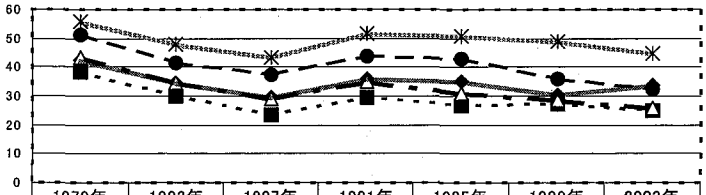


図1　好悪による政治家の分布図



（東京都選挙管理委員会データをもとに論者がグラフ化）

図2　過去3回の東京都知事選挙の年齢別投票率



	1979年	1983年	1987年	1991年	1995年	1999年	2003年
20歳	42.43	34.77	29.47	36.16	35.13	30.24	33.77
21～24歳	38.35	30.04	23.62	29.56	26.98	27.20	25.08
25～29歳	43.33	34.43	28.88	34.98	30.99	28.45	25.99
30～34歳	51.28	41.58	37.19	43.98	42.78	36.18	32.43
全体	55.95	47.96	43.19	51.56	50.67	48.96	44.94

20歳　21～24歳　25～29歳　30～34歳　全体

図3　若年層投票率の推移（都知事選挙）

表１　年代別投票者数（推定）

	1995(平成７)			1999(平成11)			2003(平成15)		
年代別	投票率	人口	投票者数	投票率	人口	投票者数	投票率	人口	投票者数
20～24歳	26.98	1,169,793	315,610	33.86	964,448	326,562	25.08	845,035	219,625
25～29歳	30.99	1,056,719	327,477	37.20	1,130,840	420,672	25.99	1,077,276	349,361
30～34歳	42.78	895,053	382,904	47.76	979,848	467,975	32.43	1,108,809	427,557
35～39歳	51.17	740,683	379,007	56.56	794,170	449,183	38.56	936,363	407,692
40～44歳	55.59	784,977	436,369	61.66	705,373	434,933	43.54	767,711	363,281
45～49歳	**56.83**	**979,147**	**556,449**	64.54	866,702	559,369	47.32	704,435	353,838
50～54歳	59.28	870,796	516,208	**68.15**	**885,080**	**603,182**	50.23	919,483	506,727
55～59歳	63.00	777,126	489,589	71.55	835,091	597,508	**55.11**	**830,364**	**514,078**
60～64歳	65.86	699,205	460,496	75.13	726,686	545,959	61.91	762,648	515,931
65～69歳	69.81	550,743	384,474	76.75	611,719	469,494	67.65	687,443	425,802
70歳以上	60.20	979,952	589,931	65.07	1,146,019	745,715	61.94	1,369,149	615,296
全　体	50.67	9,504,194	4,838,515	57.87	9,645,976	5,620,553	44.94	10,008,716	4,699,188

＊投票率は21歳から24歳まで。人口は20歳も含めた。／1995年の人口は、東京都年齢別人口推移結果から。／1999年、2003年の人口は住民基本台帳による年齢（各歳）別人口から。／太線部分は、団塊世代にあたる年代を含んでいることを示している。／□で囲ったところは、石原慎太郎・裕次郎と同世代の年代を示している。

表１ａ　49歳以下と50歳以上の投票率と投票者数（推定）

		1995年	1999年	2003年
49歳以下	投票率	44.06	50.26	35.49
	人　口	5,626,372	5,441,381	5,439,629
	投票者数	1,841,367	2,658,694	2,121,354
50歳以上	投票率	63.63	71.33	59.37
	人　口	3,877,822	4,204,595	4,569,087
	投票者数	2,440,698	2,961,858	2,577,834

投票率の差が小さくないので、若い年代が人口では多いにもかかわらず、高い年代の投票行動が、投票結果に大きな影響を与えていると考えられる。すなわち、五十歳以上の投票者たちが投票で同一に行動する傾向があると、人口では少ないにもかかわらず、高い年代の意思決定が通ることになる。

(2)『太陽の季節』

この年齢的特徴は重要である。というのも、下の図４で見るように、石原裕次郎映画の鑑賞経験という特殊な歴史的出来事について考慮するなら、東京都知事選挙への高年齢者の投票動向は、まさにこの特殊な経験により背後から一定に支えられているのではないかと考えてみたくなるからである。

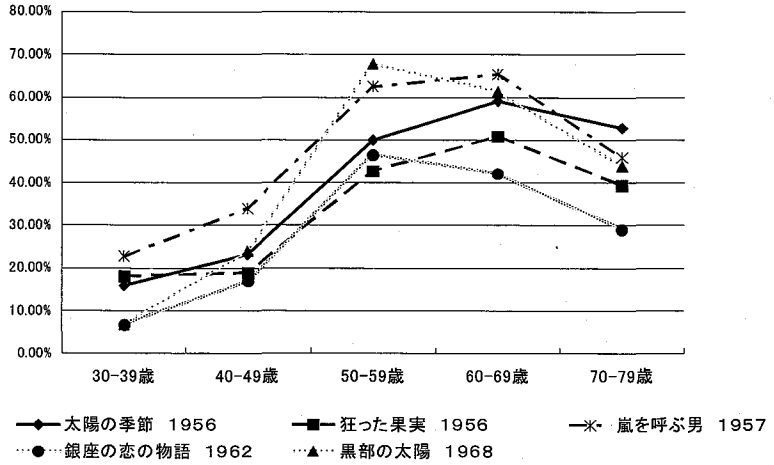


図４　石原裕次郎映画鑑賞経験

(3) 世界都市博覧会とオリンピック

石原知事は、二〇一六年オリンピックの東京誘致に精力的である。これも、かつての一九六四年の開催という、やはりある一定世代以上にある集合的記憶と関係しているはずである。

さて、一九九五年の青島都知事の誕生は、都知事としての力量、行政手腕よりも何よりも、一九九六年に予定されていた世界都市博覧会の開催是非をめぐる都民投票のような性格を帯びていた。この点では、一九九六年の都知事誕生が、すでに住民投票決定主義という直接民主主義的色彩により、すでにポピュリズムのそれが始まっていたと言えるかもしれない。[2]

ただしこの時に、青島知事誕生に寄与したと考えられる年代は、当時調査したデータから次のように言える。[3] すなわち、左の図6は一九九九年の都知事選挙における投票行動についての調査データから得られるものであるが、青島支持と石原支持とは、図の上では太い横破線軸に対称的な関係になっている。

二〇〇五年のデータと比べると、調査を実施した一九九九年から六年が経過しており、世代のカテゴリーがその年数分ずれることになる。当時の青島候補への印象的肯定の基盤には、「いじわるばあさん」「二院クラブ」などの同年代体験の記憶リソースがあったと考えられるが、この年代は前述した年代よりも若いそれであり、石原へのそれの場合の「太陽の季節」をはじめとした同時代体験の文芸的・映画的リソースではなく、いわゆる「団塊の世代」が青島知

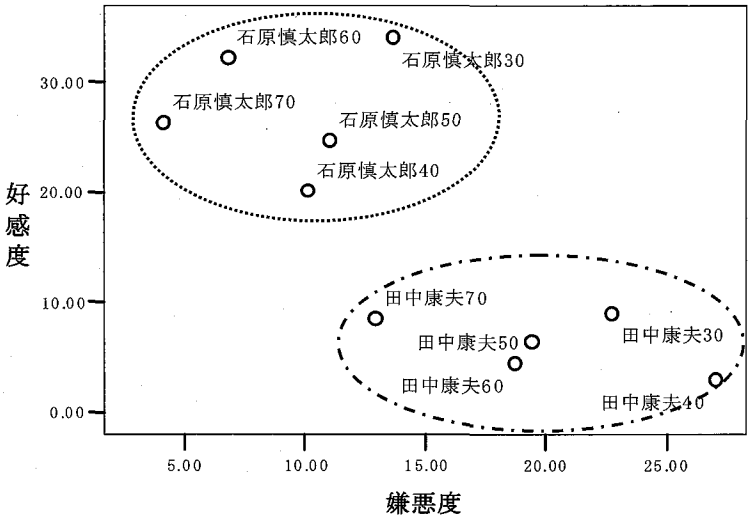


図5　政治家の好悪について年代別分布図
＊政治家の名前に続く数字が年代を示している。

映画は、ある年代には数少ない娯楽であった。ある映像イメージが集合的な記憶として焼き付けられていると考えることができるかもしれない。先の図1を年代別に割った図5からも、六十代、七十代が、石原支持について、他の年代とは違う特徴があると考えられる。

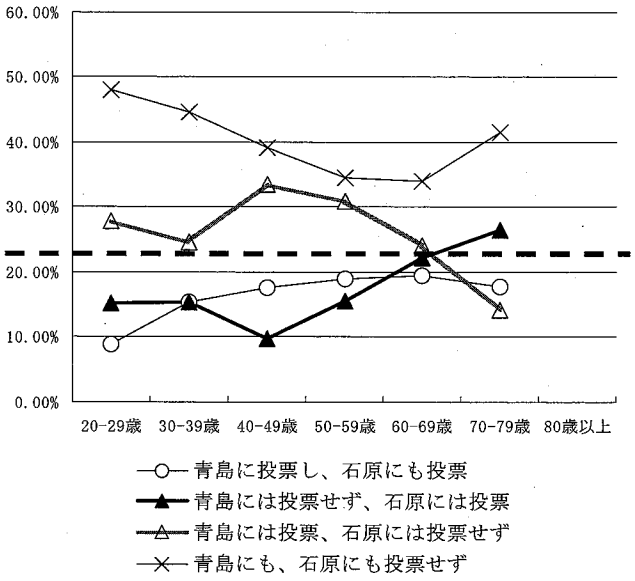


図6　青島と石原への投票のシンメトリー

事投票に寄与したと考えてみることができる。青島支持と石原支持の対称性が表現しているとおり、当時の四十―四十九歳のカテゴリーである「団塊の世代」および「全共闘世代」とその後数年の世代は、一九九五年の都知事選挙においては親青島的であった。

今後この世代の投票率が相対的に上昇すると考えると、石原が三選を狙うとなれば、当然この層の支持が不可欠である。すなわち団塊世代とそれに続く数年の層からもイメージ的肯定を調達することが必要となるが、データからは反石原的な年代であり、「太陽の季節」「黒部の太陽」などの過去のリソースだけでは、おそらく不十分であろう。したがって、オリンピックのような大きな記念事業が必要となるのかもしれない。

2. イメージの分解

さて、こうした一般的傾向を頭に入れて、データをふたつの点に着目して分析を行なう。ひとつは、「石原慎太郎」のイメージについてであり、今ひとつは、「三国人発言」に代表するように、「石原慎太郎」知事の登場当初の言動、なかでも「外国人」というテーマへの回答者の反応についてである。

(1) イメージ因子による分解―論理的肯定と印象的肯定

次の表2は、石原慎太郎のイメージ①から⑫の十二項目について、それぞれ四段階の間隔尺度で回答した結果を、因子抽出（主因子法）、因子数（最少固有値）、回転法（Kaiser の正規化を伴うバリマックス）とした（因子負荷、共通性などの基準による項目削除は行なっていない）。

これは、ほぼ予想できる結果である。抽出された因子はそれぞれ、因子1「好感因子」、因子2「嫌悪因子」とした。二〇〇三年、一九九九年の都知事選挙で石原候補に票を入れたかどうかと相関関係がある。これは、その点ではとくに目新しくない。そこで、データを

二〇〇三年の都知事選挙において石原候補に投票した対象者に限定して、同じイメージについての十二の変数で同じ分析を加えてみたのが上の表3である（因子抽出（主因子法）、因子数（最少固有値）、回転法（Kaiser の正規化を伴うバリマックス）とした（因子負荷、共通性などの基準による項目削除は行なっていない））。

ここ示されている特徴は、表2の場合とは異なり、今ひとつ因子が出現することにある。因子1を「否定因子」、因子2を「論理因子」、因子3を「印象性因子」と呼ぶ。「否定性因子」は、先の「嫌悪因子」と似ている。たいへん面白いことに、石原候補投票者に限定をした場合であるにもかかわらず、因子1として「否定性因子」が抽出されるのである。因子間の相関は、上表4のようであった。

表2　「石原慎太郎のイメージ」因子分析結果

変数（質問項目）	因子1	因子2	共通性
⑪リーダーシップがある	**0.788**	−0.129	0.637
②実行力がある	**0.759**	−0.109	0.588
⑧筋が通っている	**0.747**	−0.245	0.618
⑨時勢を把握している	0.739	−0.288	0.630
⑤都民の期待に適う政治をしている	**0.709**	−0.324	0.608
①かっこいいと思ったことがある	**0.649**	−0.238	0.478
⑥著作や原作映画の多くは面白い	0.388	−0.210	0.194
④独裁的だ	−0.185	**0.866**	0.784
③自己中心的だ	−0.205	**0.786**	0.659
⑦右翼的だ	−0.187	**0.650**	0.457
⑫パーフォーマンスが多い	−0.234	**0.575**	0.385
⑩時代錯誤だ	−0.512	**0.510**	0.522
因子寄与	3.805	2.757	6.562
因子寄与率	31.705	22.977	54.682
累積寄与率	31.705	54.682	

表3　2003年石原候補に投票した人の「石原慎太郎のイメージ」因子分析結果

変数（質問項目）	因子1	因子2	因子3	共通性
④独裁的だ	**0.850**	−0.005	−0.094	0.731
③自己中心的だ	**0.694**	−0.079	−0.161	0.514
⑫パーフォーマンスが多い	**0.487**	−0.080	−0.146	0.265
⑦右翼的だ	**0.415**	−0.135	0.015	0.191
⑨時勢を把握している	−0.090	**0.834**	0.168	0.732
⑧筋が通っている	−0.130	**0.488**	0.341	0.371
⑩時代錯誤だ	0.196	−0.306	−0.128	0.149
⑤都民の期待に適う政治をしている	−0.142	0.174	**0.461**	0.263
②実行力がある	−0.011	0.212	**0.450**	0.248
⑪リーダーシップがある	0.036	0.358	**0.448**	0.330
①かっこいいと思ったことがある	−0.056	0.100	**0.432**	0.200
⑥著作や原作映画の多くは面白い	−0.135	0.002	0.343	0.136
因子寄与	1.720	1.272	1.139	4.130
因子寄与率	14.334	14.334	9.488	38.156
累積寄与率	14.334	24.932	34.420	

表4　3因子の相関関係

	否定因子	論理的肯定因子	印象的肯定因子
否定因子	1	.394(**)	−.100(*)
論理的肯定因子	.394(**)	1	−.234(**)
印象的肯定因子	−.100(*)	−.234(**)	1

**. p<0.01 (両側)
*. p<0.05 (両側)

(2) テーマ「外国人」による分解

論理性と印象性、そして否定性という三因子の抽出は、サンプル・データからの結果ではあるが、三百万の投票者が単一構造・同質性のみにより成っているのではないということを示すものではあろう。

この多様性の確認を、「外国人問題」をテーマにしてさらに試みてみたい。石原慎太郎の政治スタンスは、東京都知事当選後、間もない頃の「三国人発言」など、「ラジカル右」という印象を一般に与えてきた。それは、一九九〇年代のヨーロッパにおける「ポピュリスト」と呼ばれた政治家たちの言動と、類似したところがある。

さて、以下では新聞記事をベースに外国人問題をテーマとした三

種類の質問文を用意し、それらへの回答者の反応を整理した。[4]

①石原都知事「不法入国、たたき出す」

――東京・池袋繁華街を視察

治安対策を公約に掲げる東京都の石原慎太郎知事と警察庁出身の竹花豊副知事が二十八日夜、ＪＲ池袋駅西口から北口にかけての繁華街を、初めて一緒に視察した。この地区は、風俗店や飲食店が集中しており、石原知事らは、警視庁の人見信男副総監らの説明を受けながら、約二〇分間にわたって歩いた。視察後、石原知事は「中国人向けの情報誌には、不法滞在者向けの広告も載っている。東京からは不法入国の外国人はたたき出す」と語気を強めた。（二〇〇三年七月二十九日『毎日新聞』より）

②「生活基盤、日本に」――イラン人一家の国外退去取り消し

不法滞在の外国人に特例で滞在を認める「在留特別許可」を求めたが認められず、逆に国外退去（退去強制）処分を受けた群馬県のイラン人一家四人が、処分の取り消しを東京入国管理局に求めた訴訟の判決が十九日、東京地裁であった。藤山雅行裁判長は、「一家は十年にわたり善良な市民として生活の基盤を築いている。帰国した場合の不利益を考えると処分は裁量権の逸脱または乱用にあたる」と述べ、四人の退去処分を取り消した。

原告代理人によると、「生活基盤が日本にある」ことを根拠に家族全員の処分を取り消した例は初めてという。入管当局は生活基盤がしっかりしている外国人の在留特別許可を認める方向にあり、判決はその流れを加速する可能性がある。（二〇〇三年九月十九日『朝日新聞』より）

③日本の「移民政策」についての石原慎太郎東京都知事の発言

私たちはそろそろ大幅、本格的な移民政策を考えるべき時に来ていると思う。考えてみれば、実は日本人のルーツはこの小さな日本列島の四方八方あちこち、シナ、朝鮮、モンゴル、遠くは東アジア、さらには大洋州のメラネシアにまで及んでいる。日本人なる人種は決して単一の血筋で出来上がっているものではなくて、実は今日のアメリカ以上の合衆国なのである。日本という国土におけるオリジナルな民族とは、今は希少化してしまった北海道のアイヌの人々と、本質的に同じ沖縄の人々しかいない。／他民族同士の混血は大脳生理学が証しているように、特殊な酵素の働きによって優秀な人材を派生しやすい。それこそが、歴史が証す「日本人」の優れた特性でもある。単に、現今のチープレイバー需要のためだけではなしに、国家民族の大計としての人口問題、年齢層の不均衡の是正などのためにも、そしてこの社会を治安の面で刻一刻とむしばみつつあるあまりに多くの不法入国不法滞在外国人問題の解決のためにも、我々は歴史的にも通用しない妙な民族意識の迷妄を断って、国家社会の新しい繁栄のために積極的な移民政策の実行に踏み切るべき時にき

ていると思われる。（二〇〇三年八月四日『産経新聞』　石原都知事の連載「日本よ」より）

以上の三つの文章それぞれに対する回答（書かれている記事の内容に対する選択肢、「1．ひじょうに賛成する、2．どちらかといえば賛成する、3．どちらかといえば賛成しない、4．まったく賛成しない」）の度数分布は表5のとおりである。新聞記事の内容から、三問順番にそれぞれ「活劇論」「寛容論」「新移民論」という見出し語をつけた。

表5　3因子の相関関係

	活劇論		寛容論		新移民論	
	度数	%	度数	%	度数	%
ひじょうに賛成する	424	**45.3**	278	**30.8**	118	14.7
どちらかといえば賛成する	385	**41.1**	424	**47.0**	289	**35.9**
どちらかといえば賛成しない	83	8.9	146	16.2	289	**35.9**
まったく賛成しない	44	4.7	55	6.1	109	13.5
合計	936	100.0	903	100.0	805	100.0

N=1020

すでに質問文からもわかることであるが、「新移民論」のそれは他と違った分布となる。おそらくは、石原を強く支持していると自ら思っていた人たちの中でも、この記事の内容については「賛成」を躊躇する人が一定の割合でいるということである。

他の諸変数との相関係数を見て、当該三変数の特徴を理解する方法をとると、下の表6に見るように、それぞれについての特色を言うことができる。

すなわち、二〇〇三年の都知事選挙での石原慎太郎候補への投票と、活劇論を評価する人との相関は高い。残りの二つの変数

表6　テーマ「外国人」3変数の特徴

変数（質問文から）	活劇論	寛容論	新移民論
03年の都知事選挙における投票行動	.308(**)	−0.034	0.057
①かっこいいと思ったことがある	.236(**)	0.044	.113(**)
②実行力がある	.185(**)	−0.026	.182(**)
③自己中心的だ	−.154(**)	0.005	−.081(*)
④独裁的だ	−.167(**)	.077(*)	−.082(*)
⑤都民の期待に適う政治をしている	.388(**)	−0.064	.130(**)
⑥著作や原作映画の多くは面白い	.144(**)	0.035	.080(*)
⑦右翼的だ	−.200(**)	0.064	−0.069
⑧筋が通っている	.282(**)	−0.046	.142(**)
⑨時勢を把握している	.306(**)	−.085(*)	.119(**)
⑩時代錯誤だ	−.402(**)	.108(**)	−.113(**)
⑪リーダーシップがある	.191(**)	−0.032	.176(**)
⑫パーフォーマンスが多い	−.165(**)	.091(**)	−.090(*)
A 東京都知事として	.397(**)	−.080(*)	.207(**)
B 政治家として	.385(**)	−0.033	.195(**)
C 作家として	.142(**)	.082(*)	.142(**)
D 人物として	.332(**)	−0.029	.168(**)
ア　先祖の供養をすることは、子々孫々への我々の責任である	.189(**)	−0.004	0.068
イ　過去の戦争で国のために死んだ人をたたえることは必要である	.268(**)	−0.048	.091(*)
ウ　過去の戦争で国のために死んだ人を追悼する必要はある	.185(**)	−.068(*)	0.069
エ　われわれが今あるのは過去の尊い犠牲になった人びとのおかげである	.197(**)	−.071(*)	0.031
公立学校行事日の丸掲揚君が代斉唱（取り組み）	**.342(**)**	−.107(**)	0.061
年齢（50未満・50以上）	−0.042	−0.026	−0.037
映画「太陽の季節」を見たことがある	.095(**)	−0.040	.116(**)

**. p<0.01（両側）　*. P<0.05（両側）

については、石原候補への投票との相関はとくにない。

次にイメージ諸変数①～⑫と三変数との関係を見てみると、先ずは活劇論と寛容論とが、ほぼ反対の関係にあるように見える。そして新移民論は、活劇論とほぼ同じような変異をしているようにも見える。しかしながら、新移民論と活劇論とには決定的な違いもある。すなわち、公立学校での「日の丸」掲揚を義務づけた石原知事を支持するかどうかという問いへの回答結果との関係を見ると、そこには大きな違いがある。[5]

3. 「新移民論」の分解

さて、新移民論はある特異性があるが、これについて、なぜその選択肢を選んだのか、その理由を自由記述での回答で得ている。筆者が熟読してカテゴリー化をし、比較可能に整理したものが図7である。

「自発的な移動が原則であり、政策による移民植民には反対」という意見の中は、旧満蒙開拓の例、南米移民が生んだ悲劇などの例を挙げて、政策的な移民に反対したいということものが複数あり、これは「労働力確保を考えねばならない」、「少子高齢化対策を考えねばならない」と対極位置にある。「必ず民族差別が発生する。共存は不可能であるし、治安を保つことがむずかしくなる」については、新移民論についての賛成、反対にかかわりなく、発生するであ

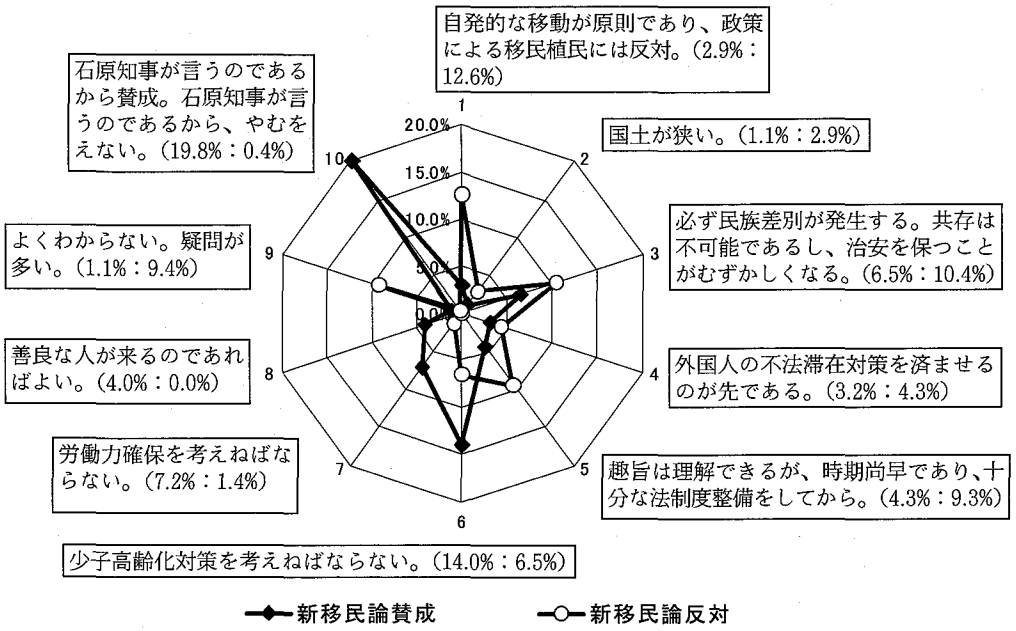


図7　新移民論について賛成・反対の意見相違

ろう問題についての相当な危惧があることがわかる。

注

＊本稿は、日本証券奨学財団平成一六年度研究調査助成金による研究成果の一部である。

（1）使用データは、「石原慎太郎」に関する自由記述収集するために、二〇〇五年秋に実施した質問紙票調査を主とし、過去に実施した同種データも参考にした。

東京都選挙管理委員会が推定している年代別投票者数割合と、使用データの年代別サンプル数割合との関係を示すと、二十歳代、三十歳代、四十歳代、五十歳代、六十歳代、七十歳代以上について、年代別投票者数割合：使用データの年代別割合は、12.1：1.1, 17.1：4.5, 15.3：10.7, 21.7：23.6, 20.0：28.6, 13.1：31.4（以上%）となる。

詳しくは、森　元孝『ポピュリズムとローカリズムの研究―東京の同化・統合のリソース』文部科学省平成十六―十七年度科学研究費補助金（基盤研究C2）研究成果報告書、二〇〇六年を参照。

（2）森　元孝「「代表制のリソース：〈東京都知事〉という人格連鎖が構成する公共性」『社会学年誌』（早稲田社会学会）第四十三巻、八七―一〇二頁。この失望感を埋める可能性のあるものとして強い期待感に支えられていた。

（3）森前掲論文参照。

（4）ここでは、二〇〇三年の都知事選挙で石原候補投票への限定を再び取り外した。

（5）ただし、寛容論と石原候補への投票との相関が低いといっても、石原候補への投票者の中に寛容論肯定が少ないということでは必ずしもない。相関がないだけで、実際相当数いる。言い換えれば、「寛容論」と名づけた文章は、かなり多くの人が、寛容にならざるをえない内容ということであろう。